
狂殺者の娯楽日誌

ぶらっく × 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂殺者の娯楽日誌

【Nコード】

N5270Y

【作者名】

ぶらつく×4

【あらすじ】

ある世界に生まれし吸血鬼は退屈を嫌う。

暇つぶしの旅に出るは学園世界。

さあ……………何が起こるかかわらないが波乱と混沌と阿鼻叫喚に包まれた物語が始まる……………

混沌空間（前書き）

どうも、作者代理の漆黒だ

オリジナルのギアル主人公小説だがはっきり言って外道は変わらんぜ
んじゃ、どうぞ

普通の生き物がすつただけで死ぬ事は出来ずに永久に苦しむ事になるであろう空気を平然と吸いながら愚痴を呟く男

「たく……………ん？……………へえ……………異世界と異世界を結び作り上げた学園……………ねえ？」

そしてその頭脳からある一つの世界がはじき出される

哀れなるその世界は科学の特化した世界と魔法に特化した世界でその二つの世界は戦争する事も無くお互いの利益を尊重し狭間の世界に学園を作り上げた

「面白そうじゃねえか、あの世界が此処まで進化するたあすげえな」

男は興味を持ったらしい哀れなる世界へ繋がる穴を開こうとしたとき

「狂殺者」

声が響く

「……………はあ……………なんの用だ？駄神」

男は心底うんざりした様子で毒を混ぜた返事を返す

「くっ……………あの世界を滅ぼす気か？」

それを聞いた男は少し驚いた顔をした後顔を歪め嗤い出す

「キ力カ力カ力カ力カ力カ力カッ！！！！お前さん等は勘違いをしているな？」

「何？」

「オレは何も狂い殺す事しか楽しみが無いそんな平々凡々な奴じゃない、何よりも娯楽を好むお洒落な吸血鬼だぜ？」

「……………」

「例えばだな……………暇だからある滅びの運命の世界の救ったり世界崩壊の術式を解除したり、良い事してるじゃねえか、みんな理由は暇だから、完全な悪って訳じゃねえんだぜ？」

その台詞について神の堪忍袋の緒が切れる

「……………ふざけるな」

「ほう？」

だが男はどこ吹く風で流し続ける

「ふざけるな！！滅びの運命から救われた世界にて貴様は確かに英雄として敬われた、だが！！その後貴様は新たな魔王として君臨、そしてその世界の全ての存在を飲み込み終わる事の無い苦しみを今も与え続けているだろう！！」

「キカカカカカカッ！！何の事だ？」

神が必死に叫ぶと言うのに男は嗤い白を切る

「ッ……………世界崩壊の術式とてあれはあまりにも廃退すぎた世界

ゆえにそれをリセットし救われぬものを救うためのものだと言うのに悪ではないと言うか!!」

「キカカカカカカッ!!!!んなもんはどうでも良い、ただただオレは暇を潰せればそれでいいんだよ」

「貴様……………ッ!!!!」

「さあて、行くとするか!!オレの行動は気まぐれ偶然運命なんて気にしない、オレはオレのやりたい事だけをやる、何者にも邪魔はさせない」

「おのれ……………!!!!」

「じゃあな、学園世界にでも行ってくるでしょう」

「待て!!!!」

「待たねーな、んじゃ!!!!」

狂殺者と名乗る男は突然目の前に開いた穴の中へと落ちる

その先にある世界に齎されるは

滅びか

消滅か

繁栄か

発展か

はたまた進化の果ての事故消滅か

その先は狂殺者は知らない

それを娯楽として行く

災厄は近い……

屋上にて（前書き）

どうも、作者代理の漆黒

今回の主人公登場だ

いや、ギアルも主人公だがこっちは第二つつーこと
でんじゃ、どうぞ

屋上にて

「ああゝ、暇暇暇暇暇あー……………」

レスギア魔法学園屋上に声が響き渡る

「おい憂助、五月蠅いぞ」

「だつてえゝ……………暇だもんー」

「たつく……………少しは静かにしとけ」

先程から暇と連呼するのは背の低い少年

彼の名は原義憂助

レスギア魔法学園一年生にして落ち零れと言われている少年である

髪は黒く艶があり目は大きくパツチリとしていて可愛いと言えば可愛いのが彼は認めたくないらしいし今は退屈と言うものによつて光はあまり無い

友人曰く背も低く顔は女顔で可愛い部類だから女装すれば相当可愛らしくなるらしい

本人曰く絶対にしないらしいが

「あーあー……………この後の授業なんだっけー？」

心底暇そうに友人に聞く憂助

そんな憂助に呆れつつもわざわざ時間割が書かれている場所まで向かい見て来る所は良い友人である

「あ？……えーと……ああ、第三魔術講義だ」

「えー……ボクサボタージュだー……」

「おいおい……確かにお前の異能は凄いがな……一応魔術講義は受けて置けよ……」

「やーだー、ボクは【兵器ノ主】ウエボンマスターで十分だよー」

「まったく……それで真面目に魔術も覚えれば学園首席に慣れるくせにな……」

「ヤダよー、ボクには魔術の才能無いんだよー？」

「たく……じゃあな、さっさと来いよ？」

「じゃーねー」

「おーう」

友人は手を振りつつ屋上から出て行く

「……暇だなー……」

憂助は屋上の床に寝転がり空を見つめ呟く

「こんな時には寝るに限るねー、おやすみー……………」

「待ちなさい!!」

「んー？」

突然聞こえてきた声に閉じかけていた目を開けて声のする方に向く

「貴方、落ち零れの憂助さんですわね？」

そこに居たのは学園内でもトップと言われている少女で彼女のいるクラス

『特待生』では成績さえ優秀であればテストの日以外は登校義務が無いのだ

「ふっふっふー、いかにもこのボクこそが!!落ち零れと呼ばれし者、原義憂助だー!!」

「ふざけてますの？」

「それ以外に何かあるのー？」

「……………まあ良いですわ、そこは私のお昼寝スポットですので、退いて下さる？」

「この世の全ては早い者勝ちなのだよワトソン君？」

「だれがワトソンですか!!」

「てゆーかいーよねー？出席義務が無いなんてさー？」

「優秀な証ですよ！！さあ！！退きなさい！！」

「フツ…………ここに寝たくば我が屍を踏み壊し蹂躪し蔑み嘲り解体し晒し消し飛ばしてから行くがよい！！」

「なんですのその極悪な死亡フラグは！？」

「これだけ言つてれば流石に発動はしないと思うよー？」

「……………はぁ……………何故貴方が避けられるのか分かった気がしますわ」

「そーなのかー」

「……………」

「どーしたのかー？」

「……………もう良いですわ、私は行きます、さようなら」

「行っちゃうのかー」

「……………気に入りました？それ」

「そーなのだー」

「……………さようなら」

「えーとー……うーん……」

「無理に考えなくてもよろしくてよ!？」

「そう?ありがとー」

「……では」

「……」

そして彼女はドアから出て行く

彼女がドアを閉めた瞬間憂助は跳ね起きて飛び退く

先程憂助が寝ていた所には棘が付いた鉄球がクレーターを作って砂煙を上げていた

「……いきなり何の用？」

憂助の手には何処にでも有るようなシャープペンシル

「ボクに攻撃は通じない、ウエボンマスター【兵器ノ主】はありとあらゆる概念を超えてボクに作用するからね」

「……へえ……ずいぶんと凄い自信だなあ？」

「何処にいるの？」

「キカカカカカカカカカカッ!!!!!!」

「!?!?.....(ボクが.....恐怖した.....?.....でも感じる.....勝てないと)」

「何処にいたかなんてそんな重要な事を教えるわけ無いだろ?」

「.....何処にしようとかボクは武器を持つ限り最強だ」

「キカカカカカカカカッ!!!!人間が持つ能力程度で俺に敵うとでも?いいだろう、その自信、完全に粉碎破壊崩壊玉砕してやるう!!!!!!」

「!?!?」

そして突然目の前に開いた穴から一人の男が落ちてきた

「キカカカカカカア!!!!!!かかって来いやあ!!!!!!」

「…………トンでもない化け物…………かなー？」

屋上にて 2（前書き）

どうも、作者代理の漆黒だ
戦闘シーンは有るが短い……
すまん
では、どうぞ

屋上にて 2

「シッ!!」

「キカア!!」

シャーペンと拳がぶつかり合い有り得ない轟音が響き渡る

その気になれば次元を割れる男の拳を受けておきながら完璧に無傷なシャーペンを男は興味深そうに見つめる

「へえ………オレのパンチの威力を最大まで受け流し自分の攻撃力を最大まで上げる、矛盾だが完璧にその矛盾を成立させているか」

「これがボクの持つ異能、ウエボンマスター【兵器ノ主】だよ」

「ほお………人間にはなかなか良い物持っているな」

「……………でしょ？吸血鬼さん？」

それを聞いた男はやれやれとオーバーに肩をすくめる

「?」

「確かにオレは吸血鬼、だがな？ただの吸血鬼じゃ足りないんだよ」

「どっいつ事？」

「キカカカカカカカカカッ!!!オレは神祖、神祖吸血鬼」

だよ」

「!？」

「キカカカカカツ、そんなに驚くことかねえ？」

「……当たり前だよ、ボクの目の前にいるのは神に限りなく近い伝説の化け物だぜ？驚かない訳が無いでしょ」

「残念なお知らせだがオレは既に神へと成った存在だぜ？狂殺神だな」

「……なんだかなあ……やる気が無くなってきたよ」

「それは困るなあ？オレとしては永き生の暇潰しに付き合っ
て欲しいんだが」

「化け物の暇潰しに付き合ったらボクの命が幾つあっても足りないよ、お断り」

「……お前が持つ異能、ウエボンマスター【兵器ノ主】だったか？武器として少しでも使用できればなんでもどんな物でも兵器並みの力を振るえる異能、だろ」

「……そうだけ何？どんな物でもボクは武器として見せる」

「キカカカカカカカツ!!お前の異能を消すのは簡単だよ、お前の異能の有無の境界に……穴を開けてやりやいいんだ」

「!？」

男が突然腕を伸ばす

その先には黒い淵がある紅い穴があった

その中に躊躇無く手を突っ込むと少し動かしてから言い放つ

「キリカッ！これでお前の異能は無くなったぜ？有無の境界を弄つてやったんだからなあ？」

一体何を言つと焦りながらシャーペンを地面に叩きつける

「……………！？」

ぶつけた瞬間シャーペンは折れて真つ二つとなる

今までなら無意識に能力で最小の衝撃で最大の威力を出せたはずなのにシャーペンは折れた

つまり既に彼に【兵器ノ主】ウエボンマスターは無い

「どうだ？今まであつた異能が無くなった気分は？」

「……………降参するよ」

「はあ……………別に勝負するつもりは無いんだぜ？お前の实力を見に来ただけだしな」

心底嫌そうに溜息をついて愚痴る憂助

「……………心臓に悪いよ」

「お前、キャラ変わってね？」

「もともとこれがボクの素だよ、あれは偽りの性格さ」

沈んだ様子の憂助に対してまったく反対の男は更に愉快そうな嗤う

「ふーん……………キカカカカカカツ、気に入ったぜ」

「へ？」

呆然とし、言われた事が嘘である事を祈りつつ憂助は男の言葉の続きを待つ

「お前のことが気に入ったつつてんだよ」

「……………なんて悪夢」

orzになりまわりに暗い色の渦巻きが出てくる憂助だが男は一切気にしない

「いやいや、お褒めに預かり光栄だ」

「褒めてないし」

「オレにとっては褒め言葉だぜ」

「はあ……………」

普段の彼を見ている人物が見たら驚愕するだろう憂助の溜息だがそんなもの目にもかけずに思案する男

「そうだな……………よし、教師でもやってみるか？」

「うん、お願いだから止めて」

「面白そうだな、よし、決定だ」

「本気でお願いしますやめてください」

「無理♪（***流スマイル）」

「……………さらばボクの結構平和な学園生活」

「キカカカカカカカカッ！！どうせ暇していたんだろ？なら良いじゃねえか」

「何事にも限度っていうものがあるんだよ？」

呆れ顔の憂助に男は大嗤いで返す

「ンなモンしらねえなあ？キカカカカカカッ！！そんじゃあな？」

「……………じゃあね、バケモノさん」

「キカカカカカカカッ！！俺はそんなチャチなもんじゃねえよ」

「？」

「最低最悪最強最狂最凶最恐の大バケモノだぜ？」

「……………そうだね」

「キカカカカカ、キカカカカカカカカカカカカカカカッ！！！！」

そして男は穴に落ちた

残るは真っ二つに折れたシャープンを持つ憂助のみ

「兆死に一生を得た……………かなー？」

屋上にて 2（後書き）

ちなみに***には男の名前が入るんだが………

殆どの方が分かっているだろうが一応形式上名前は伏せておいた
んじゃ、また次回

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5270y/>

狂殺者の娯楽日誌

2011年11月26日20時59分発行